



昨年の実績と研修の必要性について

発表者：岐阜北ロータリークラブ
研修リーダー 波多野 光裕

昨年度（第38期）は、コロナの影響で42回予定されていた例会が31回に減少し、主要な行事も中止となってしまった。そのような状況のもと、会員のための研修となったと思われる例会等を時系列に挙げてみる。

1. 10月2日 米山奨学委員会によるクラブフォーラム

当クラブで受け入れていた米山奨学生のタリエレヴァ・ナルギリアさん（ナルちゃん）は、中央アジアのスイスとよばれるキルギスの女性です。このナルちゃんの卓話を聞いた。テーマは、キルギスの歴史に始まり、日本を選んだ理由、大学の研究課題（介護）、将来の夢であった。キルギスの伝説で「キルギス人と日本人が兄弟で、肉が好きな者はキルギス人となり、魚が好きな者は東に渡って日本人となった」というくらい親日な国ということを知った。ナルちゃんは、日本語弁論大会にチャレンジしたり、会員の和菓子店で和菓子づくりを体験したり、12月のクリスマス例会では、会員家族の前でキルギスの楽器を演奏してくれた。これら以外にも、当クラブの行事に積極的に参加していただき、ナルちゃんを通して、ロータリー活動を好きになった若手会員が沢山増えたと思う。

2. 2月13日 企画委員会による北RCよもやま話と職業奉仕委員会による職場例会

職場訪問が昼食後ということもあり、近く中華料理店で昼食（委員会負担）を挟んで、長老会員6名より、岐阜北RCの歴史を拝聴した。ロータリー歴の若い会員は勿論のこと、私のような中途半端な会員にも非常に参考になった。そして、昼食後は職場例会であった。今回の職場例会は、あえて他RCの会員やLCの会員の所属する事業所を訪問した。その会社や事業の説明を聴くと同時に、他RCやLCについても端々に聴くことができた。他クラブをメーカーで訪れたりしようという意識付けになったのではないかな。

3. 6月27日 親睦交流委員会によるフィナーレ例会

3月11日よりほとんど休会であったなか、久々に開催された例会であった。通常はロータリー活動を側面から援助してくれる奥様達も一緒に開催されるフィナーレ例会であるが、今回は密を避けるために、会員に限定した。コロナ禍の中、火中に栗を拾う人は少ないと思っていたが、75%の会員が出席し、ソーシャル・ディスタンスも考慮しない密な状態となった。幸い何事もなかったが、今回のような長期休会の後は、RCを忘れる会員や出席を怖れる会員が出てもおかしくはないと思っていたが、ロータリーの集いを待ち望んでいる会員が多かったことに安堵した。